

第8回モニタリング委員会の議事概要及びその対応

第8回モニタリング委員会の議事概要及びその対応（1／3）

分類	NO	質問・意見等	委員会での回答	備考
植物調査に関する意見や今後のモニタリングに関する要望	1	湿性草地再生実験地でトネハナヤスリが初めて確認されたのはいつか。	表土の撒きだし区で施工直後に確認された。	
	2	セイタカアワダチソウ対策については水位をコントロールする場所を設けて（堰き上げなど）、再度検証をできるとよい。 現況を保全する地区では、掘削以外の方法で、セイタカアワダチソウを駆除しなければならない。有効であれば、水位のコントロールを主とした対策を講じてほしい。	現段階で、水位のコントロールが可能な場所が見当たらないが、今後の掘削地でそのような対応が可能か検討する。	
	3	表土撒き出しの候補地は、冠水頻度が低く（10%以下）、対策を講じないとセイタカアワダチソウが侵入すると予想される場所に設定するとよい。実験的に「撒きだし区」と「対照区」を設けて効果を検証してほしい。	掘削地周辺の法面では外来植物が生育しやすいと考えられる。そのような場所で、表土の撒きだし実験ができるか検討する。	今後施工する次期掘削検討箇所の法面等において表土の撒きだし実験を実施する。
	4	環境学習フィールド（1）の池では、水温が非常に高くなることが明らかになった。そのような環境に生息できる生物は限定される。水温は池の生物相を左右する重要なファクターの一つであると考えられることから、他の掘削地の池でも水温の連続測定を行ってほしい。		本年度、掘削地の全ての池に水位・水温ロガーを設置し、モニタリングを実施している（資料 6-P12, P13）。
	5	環境学習フィールド（2）で、ヤナギの抜き取りにより、ヌカキビやカンエンガヤツリが増加したのであれば、他の掘削地でも効果が期待できる。		
	6	掘削が陸上植物の多様性を向上させているのは望ましい結果である。一方で、水中に沈水植物が見られないので、今後も水中に着目して植物調査を実施してほしい。 水温の低い春にも沈水植物の芽生えが見られないことから、夏に水温が高温になることが、沈水植物の生育できない理由ではないと考えている。		「沈水植物が生育する池」と「掘削地の池」で水質分析を行い、沈水植物の生育条件について比較・検討を行う（資料 6-P14）。
	7	藤岡ゴルフ場の西側に位置する掘削地には沈水植物が生育している。また、20～30年前は池内水路にも水草が見られた。		

第8回モニタリング委員会の議事概要及びその対応（2／3）

分類	NO	質問・意見等	委員会での回答	備考
動物調査に関する意見や今後のモニタリングに関する要望	8	渡良瀬遊水地に生息する昆虫を見ると、環境省レッドリストに指定されている昆虫が62種含まれている。その内19種がオサムシ科の昆虫である。今後、ワタラセハンミョウモドキの現地調査で、オサムシ科の貴重な昆虫を確認した場合は記録してほしい。		本年度の現地調査では、ワタラセハンミョウモドキ以外のオサムシ科の昆虫についても種名を記録した（資料6-P35）。
	9	これまでの観察によれば、5月に降雨量が多いとカエルなどの両生類が活発に活動するようになり、それがサンカノゴイなどのサギ類に良い影響を与えている可能性がある。		
	10	渡良瀬遊水地ではオオセッカが増加傾向にあるが、その要因として、スゲ類の混生するヨシ原が増えたことが考えられる。		
	11	平成25年度の河川水辺の国勢調査では、ハタネズミを確認することはできなかったようである。渡良瀬遊水地には非常に多くのハタネズミが生息しており、ハタネズミが猛禽類の主要な餌動物となっている。特にハタネズミの個体数とトラフズクの渡来数には密接な関係がある。		
	12	平成25年度の河川水辺の国勢調査では確認することはできなかったようであるが、渡良瀬遊水地にはクサガメも生息している。		
	13	全国的に淡水での外来魚の定着が問題となっている。第二調節池においても、掘削地の池に外来魚が持ち込まれないように注意してほしい。	利根川水系の河川には多くの外来魚が生息し、ブラックバス、チャネルキャットフィッシュ、ソウギョ、レンギョなどが見られる。来年度の河川水辺の国勢調査では、これらの外来魚に着目して調査を行いたい。	本年度、河川水辺の国勢調査（魚類）を実施している。今回の資料（資料6-P36）で調査結果を報告する。
	14	渡良瀬遊水地ではイノシシが確認されるようになった。個体数も増加していると考えられ、今後の動向に注意が必要である。		
	15	カエル類などの両生類は渡良瀬遊水地の生態系の中で重要な位置を占められると思われるが、それらのカエル類の増加に掘削地が寄与している可能性がある。例えば、環境学習フィールド（1）ではニホンアカガエルの卵塊が年々増加している（H22：3個、H23：13個、H24：30個強、H25：242個）。今後は両生類の生息状況もモニタリングできるとよい。		
	16	現況を保全する地区では、総合的なモニタリングを念頭において、植物調査だけでなく動物調査も実施してほしい。	現況を保全する地区において配慮する必要のある具体的な動物や生息地があればご教示いただきたい。	
	17	野鳥の調査を行う場合はアオジにも注意を払ってほしい。 最近の観察から、第二調節池ではアオジが繁殖している可能性がある。 アオジは1年に3季繁殖することから、1年を通じて調査を行うことが可能となる。		

第8回モニタリング委員会の議事概要及びその対応（3／3）

分類	NO	質問・意見等	委員会での回答	備考
掘削形状や掘削後の維持管理に関する意見	18	水位のコントロールによって、ヤナギやセイタカアワダチソウの生育を抑制できないか検討する必要がある。 そのためには自然状態の湿地がどのようなものであったのか考えることが重要である。具体的には、赤麻沼が維持されていた時の状況や、渡良瀬川による当時の攪乱状況が参考になると思われる。以上の内容を踏まえて、水位のコントロールに資するデータを、次回の委員会で提示してほしい。	周辺の土地利用や河川の形態、流況が変化していることから、水位変動などを過去の姿に戻すのは難しいと考えている。 今回の湿地再生で重要なことは、多様な湿地や池を造成することによって、生物多様性の向上に寄与することであると考えている。 掘削で思うような結果が得られない場合には、検討委員会に状況を報告し、計画の見直しを含めて検討を行う。	
	19	水位変動型実験地の水際環境については、河川の営力によって、生物相の豊かな湿地が維持されていることから、今後の掘削の参考事例となると考えられる。		
	20	掘削地周辺の法面をなだらかにすることで、ヨシ焼きの火が入りやすくなり、ヤナギの生育を抑制できると考えられる。	ご指摘の通り、掘削地周辺の法面の勾配が大きいと、ヨシ焼きの火が掘削地に入りにくい上、法面に外来種が生育しやすくなることから、それらに注意しながら掘削形状を検討していきたい。 現在の実験地についても周辺の法面の勾配が大きいですが、実験地間の未掘削エリアは、最終的に切り下げる予定である。	
	21	掘削が開始する前から猛禽類の調査を行っているが、第二調節池では、猛禽類の利用頻度が減少している。これは、ヨシ焼きによって樹林が減少し、第二調節池がヨシの密生した単純な環境になりつつあるためと考えられる。 計画的に樹林を保全することについても検討してほしい。		現在の計画では、「現況を保全する地区」内に見られる樹林を保全する予定である。